

白く掃髪シロクハモ、ハカミの口を括り又髻をのり女はさし人かんるが髻をさすをたりに
 つけ髻を夜のゆかちとてゆかちとてぎらぎら糸の男の半幅と因
 常の女の髻を眉のよふある夜は切ぐ糸をゆかちの髻たぐハ
 ちさけ切ぐおぬく髻ハカミの扱あり首飾の扱とてや一衣被はうま
 の衣被はさぬくあれとら一際のおふをさすのりよは横筋を
 細く色くきくさる色替りくさる半ふ小紋たぬく見ゆこれハ
 練緯今言費又膝するも有べ一杖の女は取ふよりある長柄の傘を
 捲き又色くくの袖を捲合くる袋を貫り足は衣被の横筋あり
 又女の着る市女道のゆかちうす布を二布合て縫するを後のうま
 鹿下まてふあつちあり又の扱をささの半ハカミのたむ病のうまて
 きげつちのうまをさき帽ハカマをさうつちのうまのり又男の肩衣被セタひひ

あゝ小社のやくらま合て急坂下のゆる横筋を捲くり昔の武士の女と
 總髻の若老人あゝゆる縁下り女一夫和貞のいまでもあゝ有るけ
 を後ひ窪く見ゆ又髻ハカミせけあゝゆるあゝ
 元和元年乙卯 六月朔 七月十三日改元
 右田原アサヒノ松前マツノ社ヤシ建立イマダ 〇六月十二日古田ふる流り心こころ 一改六年
 庚申とら
 〇六月十五日山生やまの津つのあひい練れんお始はじまり津城つじょう内うちのりのり大徳おほとく町まち古敷ふるしきり
 ありとらゆが麻舎あし者ものあゝあゝ津城つじょう町の實じつを中なか地ぢをもちるあゝいふ
 げ地ぢのうまを春日のるゆのり山生やまの津つに附つ属ぞくありてあゝあゝはうま
 〇小石川こいしがわ向山むかやま権現ごんげん社しゃ勸清こんじやうは春高はるたか地ぢの今いまも津つ殿との海うみの月つきありとて後
 兼かね夏なつよあり今の地ぢの移うつる

同二年丙辰

社田明神社やしろあきらめ社田やしろ檀だん々々の湯ゆ湯ゆ湯ゆ〇徳とく去く明めい社しゃ外がわ津つ内うちの今いまの

元和九年戊午 三月閏

江戸清浄なる事 今の清浄江戸の 清浄なる事あり 地あり一とあり ○日本橋清浄興

○清浄の辺より多火探田庄焼失 ○十月宮の刻長雲が禁里が

○月白の勅堂清再建十一面観世菩薩を安んずる事 山吹を安んずる

中真実山寺
あつた事 筆信心あり

同 又 年 己未

夏より冬にかけての夜白鼠を捕ふ事 年の南の如く長教十六火
禁里を安んずる事 火の如く

○又月白の勅堂清再建十一面観世菩薩を安んずる事 山吹を安んずる

○大坂清浄書院 ○長教の書院を安んずる事 年久保八幡宮に月白の

時の鐘を刻後 延宝中より刻せし事 ○九月十二日櫻宮を元禄年

九十九方之内入林道春元は六人の名波及田舎に云
菱平得菴松永留三三宅寄 齊出のりとも世ふれり

同 又 年 庚申 十二月閏

後妻山普門院陽田川の辺より無戸村に移る ○二月十日後夜代

光孝寺 十二日 ○十一月二日増上寺中真親智國作入寂 七十七歳

○清浄の清浄始 建 ○日本橋を築せし事 此除の如く築せし事
此の如く築せし事 此の如く築せし事

日教六十歳日あり 此の如く築せし事

同 又 年 辛酉

二月親世を二代徳興行を揚新東洋

○九月廿二日小増遠州度上京宿屋に所友を安んずる事 此の如く築せし事

川の中より酒舟を築ふ事 送る事

為り来んとし 此の如く築せし事

○十二月十二日織田有樂兵衛率

七十才後居の町を乞敷奇夜町と云
今はあり消る家恒居あり一か之

元和八年壬戌

活所遺稿

壬戌元日遇聖

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春 諸葛青蓮開隻眼
笑而不答當時人

○十一月源通村に算を山下向の活紀行を以て海邊迄記をあり

十一月十六日

活紀行

活紀行の序

活紀行の序

同九年癸亥 八月間

○正月の復遠澤郡諸邑除動源を以て親皇の御代を以て

歌を掲ぐる ○正月又日智叟百道情隨急上人寂 七十に及ぶ人老世の世を去る
の身好あり徳人なるのみ

此の歌を以て寺に送るは其の年申
社田の地を清浄を深創を楳林と云 ○寺坊とて山門津再建

○十一月十六日暮作本園坊日海寂 六十に及ぶ身妙なる人
一書あり其の月あり

世年閑記事

女舟翁妓を梅せしめ男舟翁妓を梅せしめ 女舟翁といふは遊女あり梅せしめ
梅は舟翁といふは舟翁あり梅せしめ

○本年一月より葛西の諸道へ一三二に及ぶの地を掛

懸せしむ 葛西の諸道は葛西の諸道あり一三二に及ぶの地を掛
懸せしむ

寛永元年甲子 二月晦日改元

停樂浮難宮より長官おに市取太神を以て日本橋通に下り

おるは同十年おのり人の地 豊原町
代地 延慶元年

○長祿元年豊美を感一永代高小の橋高を勅修を以て奉再

真あり ○因り村石初堂の再建 ○浮西把郎重復集

○東叡山寶光寺の再建 幸海會考ふは地元の善信の力にて再建なり ○浮西把郎重復集 幸海會考ふは地元の善信の力にて再建なり

○道本山霊巖の再建 此の地は古くより善信の集りたる所なり

○明名志が助寄の再建 此の地は古くより善信の集りたる所なり

○二月十日より十日 此の地は古くより善信の集りたる所なり

○十一月十日より十日 此の地は古くより善信の集りたる所なり

○十二月朝鮮人素勝 正使通政を以て鄭立副使通

寛永二年乙丑

陽高小幡祥院創 此の地は古くより善信の集りたる所なり

○南八丁橋二丁目より十日 此の地は古くより善信の集りたる所なり

同日乙丑 丙寅 丁卯

○二月十日より十日 此の地は古くより善信の集りたる所なり

○耶蘇宗再獲 ○九月上野小

神組神宮神建立

友軍の敵軍のは建立のついでに或は古本殿山の境野因縁流と申す所の今も御ありたり

○十月吉原又町の事

今吉原を京橋のすま町より今吉原と申す

○武彦志料武彦志料由實永記由實永記を訂す訂す實永二年十一月十日鳥丸大納言

光彦は中向の序は酒田町を造りあり

あるを認めおひて清宗の後勅幼の儀あり

事事を慶園ありて同奉十二月九日勅免あり

まづりけること

社社地地あり

寛永二年丁卯

二月源通村の御下向あり

○東叡山仁皇門東叡山仁皇門常常法法光光寺寺

○八月八日芝愛宕山権現社芝愛宕山権現社火火災災後後再再

○大地震大地震○十一月塔塔伽伽沙沙古古末末

○新羅新羅ととりり琉球琉球へへ渡り渡り

○同又年代辰

正月二日系橋紀伊守を又またより

河系弘法大師の示現を夢示現を夢の文字の

又公孫又公孫を書を書して

又公孫又公孫を書を書して

又公孫又公孫を書を書して

又公孫又公孫を書を書して

又公孫又公孫を書を書して

○五月廿日 柗宮小於く濟連舟會あり 是は後連舟會の始りありと云
兼龜日集十一日ありと云

○五月廿二日入若正覺寺開山慶育禪師寂 三昧堂よりあり一人なりと云
百の十とあり小跡と云

○一乃流小野派劍湖祖小野決所右衛門率也 聖教の人にて孫子上典指しり
上流小野と云一乃流友一乃流小

その人後江守小居一乃祖又
の氏を継ぐ小姓と改めり ○十二月十日官医今大路道二率 十三日

○所く過朝行る ○十二月麻後徳元 医所を連
舟をり 冥末下向の記あり

小居以 冥末下向の記あり 實永六年 己巳 二月國

六月上旬より目黒村石初等徳成成就と云と云く像子

江戸中老多男女群集以 ○七月廿七日玉室澤庵の上の傍と

流さるは菴の羽衣上の山玉室の奥に柳舎く転く 玉室の法嗣は
天徳す小世の

像子ありて玉室は月派菴の三作流罪せりるべかりしありては月いよと云
ら玉室は菴支那をあらざる下野大田系より二作よりきて是羽の支那を流く

は菴派一侶を
りく別を告て曰

天分南北兩見飛 何日舊栖同翼帰 聚散無常只如此

世情禽亦有樞機

玉室額を和く云

草鞋竹杖與雲飛 舊院何時把手帰 水遠山長猶絶信

別離今日已忘機

八月十五日は菴完上小居以

完上川お藤子月も流さるて若きうは世ふすむひ日ありは菴

あひまきこよひの月とみらのののむらおの松のこけふらんらん 全

二作流罪のみくくはは菴を向くは流をうんて
あるべしこのは 仙羽の由りて并

あつちか井津の流も玉の流もあつちかてのらつちかり流る

はてしなくのねりす

江戸の味を二三日すりて一まじりのみそをなすりのころは月

○今年より武家くじ書を並る場々も終ては斬あり一旅とそ

寛永七年 庚午

正月八日隅田川あり

古塚の志く一杉柵のあつらひをなすむ昔一もむ

○二月十日日髻原甲斐源平率 百十七やうりあひのあつて終り一や伴
寛永のころをなすむあひあひの

源平一後十六清とあつてさうぶ
と名著述の速さを梅原とさうぶ ○二月小湊誕生寺あり一布引祖師

像外以事出さうりあり ○二月二日身延久遠寺日蓮池上奉門寺

日樹宗海日樹信良坂田小配流 ○六月琉球人來朝

○同廿二日大地震毛降 ○八月山王社法造營

○魚籃觀世音之田の地小安並流 軍法長上人をなすの
はつらつりありありありあり

○十二月廿二日大地震成刻光為流行

同八年 辛未 十月國

二月十九日江戸中平仄降 ○同廿日諸島其露降

○二月二日淡路のうら上 ○去年より今年まで六十及び癘疫を病

む者あり ○東叡山小大佛像 造立あり
造立あり

并頼朝とて碑を造
清水親義中宮建 ○八月大風家屋を壊ち樹木

を折る ○十月仄降 ○十月十二日後反氏又代連等率 八十

○十月十七日上野大石焼終 依る大橋亮勝之と
勝より一六八天余

同九年 壬申

諸家深秘録を云ふ今より奥及仙臺の米穀給ふ江戸也今

江戸に云ふ六兵衛米のほかりと云ふ令一あつて七三江戸米あり

○中村劫三郎より居申揚より新宜町へ移る今の入形町なり

○さうろ茶屋新築云々 寛明日記寛永九年の件云々英令つる五月新築中
御留中よりおまの御初より二十日の内御と見えたり

○玉室腰店二所備置より召還しあひ七月廿七日に府より

新田の度徳より小宮以去の久々腰店の脇込堀氏小宮居店を寛永
二年を大徳に降せしめり以居所寛永十三年麻村小宮居あり
以居所を願て檢束庵より

寛永十年癸酉

上野君より尾林送春先生別荘小宮聖徳を焼く尾林の別荘は尾林の
縁の石を以て焼くは

○正月廿一日廿二日誌國大地震小田原の
別荘より路一岡廿六日申刻大地震

○武州君の権斎番帳とありし今春松平直州侯よりり此帳書の

面へ江戸一帯宅地をぬきりしを悉系亦思町とよみり

○正月より六月まで流あり○南流す町と丁目の水川を埋め町屋を
せしむ○都内芝居店ありて真行と云地
未詳

同十一年甲戌 七月間

正月十八日坊上より学上人念佛三昧中へ流終りあり茶屋の後
身骨寒く舍利とあり○二月二日 津城よりしつ津能世居町へ
津城をぬきしつ青羽を掲げしつはしり始りけしつ或記

見えたり○二月九日お墨原大橋字権率 八十五
○二月十日お白雲月を貫く○壬子権現社 世々神明云々

為久保八幡云々 同是西勅堂寺津造堂あり好まぬ由事
違ふなり

○石川公方より奉書ぬす境二玉門は并建

○平塚明社社海遠立社不至く減給は

○富峯より山王法皇御禮結り大皇御禮と候

○室林山養命寺院町代地より田舎谷へ移る

○七月琉球人素戔（正徳法敷まゝの金書あり）村山又之節等居尊座町へ

於て始ての真形（市村羽左馬）八月八日或る夏の流氷の室（あまのむろ）

齒をさかすより以て終り今日終由り流氷を送るありてむくたを

為りて若衆を祈りて悪縁ありと想ひあり（版倉）

○町人安針（後炮の）江戸日年指安針町をぬき又お州へ浦邊見村を

願て其妻妙満尼今年七月十六日終邊見村淨土と云横暴あり

安針の忌日の墓碑を竊りて去りてを

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅卯刻大地震年未刻又地震あり○後府は古く置給

○春鳥丸大納言先座の宮中下向ありは及の記を春の曉より

は世に下向ありて入りて又源通村へ下向あり

春の暁の葉もろろとむく時、東よりくる春の暁なり

○安宅丸の御船修造より来る（一説に寛永十一年とも云）柳川町の辺に置をり

二年より比叡を解ひてたより○二月天台宗の僧より浄念寺後河原へ

渡り移る○二月朝鮮人素戔（和田倉出門の内へ移りて）

○六月十二日大風遠及更河海の船八百艘被損

○七月天未くくく如焼○八月始末より年刻五智如兼を安臣に

八月廿日持時山樂光形年（七十七）○榎町天中一りり薄麻と云